武蔵野日曜聖書講筵

# 最初の殉道者ステパノ

## ――使徒行伝第６、７章――

１９９１年５月12日
小池辰雄

ステパノとピリポ　聖霊の権威　ステパノの大演説　我は在りて在らしむるもの　聖霊に逆らう　天国人　天国行きか地獄行きか　最初の殉道者ステパノ

**【使徒行伝６】**

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。2ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差措きて、食卓に事うるは宣しからず。3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈りをなすことと、御言に事うることとを務めん』5集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とにて満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。

7かくて神の言ますます弘まり、弟子の数エルサレムにて甚だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に従えるもの多かりき。

8さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大いなる不思議と徴とを行えり。9ここに世に称うるリベルテンの会堂およびクレネ人、アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸会堂より、人々起ちてステパノと論ぜしが、10その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。11乃ち或者どもを唆かして『我らはステパノが、モーセと神とを瀆す言をいうを聞けり』と言わしめ、12民および長老・学者らを煽動し、俄に来りてステパノを捕え、議会に曳きゆき、13偽証者を立てて言わしむ『この人はこの聖なる所と律法とに逆う言を語りて止まず、14即ち、かのナザレのイエスは此の所を毀ち、かつモーセの伝えし例を変うべしと、彼が云えるを聞けり』と。15ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔の如くなりき。

**【使徒行伝７】**

1かくて大祭司いう『此等のこと果たしてかくの如きか』2ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だカランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、栄光の神あらわれて、3「なんじの土地、なんじの親族を離れて、我が示さんとする地に往け」と言い給えり。4ここにカルデヤの地に出でてカランに住みたりしが、その父の死にしのち、神は彼を彼処より汝らの今住める此の地に移らしめ、5此処にて足、蹈立つる程の地をも嗣業に与え給わざりき。然るに、その地を未だ子なかりし彼と彼の裔とに所有として与えんと約し給えり。6神また其の裔は他の国に寄寓人となり、その国人は之を四百年のあいだ奴隷となして苦しめん事を告げ給えり。7神いい給う「われは彼らを奴隷とする国人を審かん、然るのち彼等その国を出で、この処にて我に事えん」8神また割礼の契約をアブラハムに与え給いたれば、イサクを生みて八日めに之に割礼を行えり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。9先祖たちヨセフを嫉みてエジプトに売りしに、神は彼と偕に在して、10凡ての患難より之を救い出し、エジプトの王パロの前にて寵愛を得させ、また智慧を与え給いたれば、パロ之を立ててエジプトと己が全家との宰となせり。11時にエジプトとカナンの全地とに饑饉ありて大いなる患難おこり、我らの先祖たち糧を求め得ざりしが、12ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先ず我らの先祖たちを遣す。13二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏族パロに明かになれり。14ヨセフ言い遣して己が父ヤコブと凡ての親族と七十五人を招きたれば、15ヤコブ、エジプトに下り、彼処にて己も我らの先祖たちも死にたり。16彼等シケムに送られ、曾てアブラハムがシケムにてハモルの子等より銀をもて買い置きし墓に葬られたり。17かくて神のアブラハムに語り給いし約束の時近づくに随いて、民はエジプトに蕃えひろがり、18ヨセフを知らぬ他の王、エジプトに起こるに及べり。19王は悪計をもて我らの同族にあたり、我らの先祖たちを苦しめて、其の嬰児の生存うる事なからんよう、之を棄つるに至らしめたり。20その頃モーセ生まれて甚うるわしくして三月のあいだ父の家に育てられ、21遂に棄てられしを、パロの娘ひき上げて己が子として育てたり。22かくてモーセはエジプト人の凡ての学術を教えられ、言と業とに能力あり。23年齢四十になりたる時、おのが兄弟たるイスラエルの子孫を顧みる心おこり、24一人の害わるるを見て之を護り、エジプト人を撃ちて、虐げらるる者の仇を復せり。25彼は己の手によりて神が救いを与えんとし給うことを、兄弟たち悟りしならんと思いたるに、悟らざりき。26翌日かれらの相争うところに現れて和睦を勧めて言う「人々よ、汝らは兄弟なるに、何ぞ互いに害うか」27隣りを害う

者モりーセを押退けて言う「誰が汝を立てて我らの司また審判人とせしぞ、
28昨日エジプト人を殺したる如く、我をも殺さんとするか」29この言により、
モーセ遁れてミデアンの地の寄寓人となり、彼処にて二人の子を儲けたり。
30四十年を歴て後シナイ山の荒野にて、御使、柴の焔のなかに現れたれば、
31モーセ之を見て視るところを怪しみ、認めんとして近づきしとき、主の声
あり。曰く、32「我は汝の先祖たちの神、即ちアブラハム、イサク、ヤコブ
の神なり」モーセ戦慄き敢えて認むることを為ず。33主いい給う「なんじの
足の鞋を脱げ、なんじの立つところは聖なる地なり。34我エジプトに居る我
が民の苦難を見、その歎息をききて之を救わん為に降れり。いで我なんじを
エジプトに遣さん」35斯く彼らが「誰が汝を立てて司また審判人とせしぞ」
と言いて拒みし此のモーセを、神は柴のなかに現れたる御使の手により、司
また救人として遣し給えり。36この人かれらを導き出し、エジプトの地にても、
また紅海および四十年のあいだ荒野にても、不思議と徴とを行いたり。37イ
スラエルの子らに「神は汝らの兄弟の中より、我がごとき預言者を起こし給
わん」と云いしは此のモーセなり。38彼はシナイ山にて語りし御使および我
らの先祖たちと偕に荒野なる集会に在りて汝らに与えん為に生ける御言を授
かりし人なり。39然るに我らの先祖たちは此の人に従うことを好まず、反っ
て之を押退け、その心エジプトに還りて、40アロンに言う「我らに先だち往
くべき神々を造れ、我らをエジプトの地より導き出しし、かのモーセの如何
になりしかを知らざればなり」41その頃かれら犢を造り、その偶像に犠牲をさ
さげて己が手の所作を喜べり。42爰に神は彼らを離れ、その天の軍勢に事う
るに任せ給えり。これは預言者たちの書に「イスラエルの家よ、なんじら荒
野にて四十年の間、屠りし畜と犠牲とを我に献げしや。43汝らは拝せんとし
て造れる像、すなわちモロクの幕屋と神ロンパの星とを舁きたり。われ汝ら
をバビロンの彼方に移さん」と録されたるが如し。44我らの先祖たちは荒野
にて証の幕屋を有てり、モーセに語り給いし者の、彼が見し式に循いて造れ
と命じ給いしままなり。45我らの先祖たちは之を承け継ぎ、先祖たちの前よ
り神の逐いいだし給いし異邦人の領地を収めし時、ヨシユアとともに携え来
りてダビデの日に及べり。46ダビデ神の前に恩恵を得て、ヤコブの神のため
に住処を設けんと求めたり。47而して、その家を建てたるはソロモンなりき。
48されど至高者は手にて造れる所に住み給わず、即ち預言者の49「主のたま
わく、天は我が座位、地は我が足台なり。汝等わが為に如何なる家をか建てん、
わが休息のところは何処なるぞ。50わが手は凡て此等の物を造りしにあらず
や」と云えるが如し。51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖

霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。52汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』

54人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向う。55ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、58ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠に就けり。

## ●ステパノとピリポ

今日は使徒行伝の第6、7章から、目抜きの所だけさらっていきます。

1**そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。**

「ギリシヤ語のユダヤ人」とは、いわゆる

「ヘレニスト」

というんで、

「ディアスポラ」（離散しているユダヤ人）

ですね。即ち、イスラエルとユダヤの国が滅びて、ユダヤ人が方々に散ったでしょ。その離散しているユダヤ人のことを「ディアスポラ」というんです。特にギリシヤ語が、アレキサンダーが征服してから、今の英語みたいに通用語になったものだから、ギリシヤ語を語っているところの「ディアスポラ」のユダヤ人ということです。

ヘブル語のユダヤ人というのは生粋のユダヤ人ですね。イスラエルの土地に住み込んでいる。だから、こっちの方が待遇をよくされて、「ディアスポラ」のギリシヤ語のユダヤ人の方が待遇が悪いものだから、

**「施済に漏らされて」**

というのはそのことです。不平を言っているわけだ。これは何とかしなくてはならんと。

2**ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差措きて、食卓に事うるは宜しからず。3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈りをなすことと、御言に事うることとを務めん』**5集まれる凡ての者

**この言を善しとし、信仰と聖霊とにて満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、**

その人たちに公平な分配をするようにやらせろ、ということなんですね。

**「御霊と智慧とにて満ちたる」**

という、そこにズラズラと名前が七人のっかっているんだけれども、特に大事なのは最初の二人、ステパノとピリポです。ピリポのことも使徒行伝に出てきます。素晴らしい伝道をした人です。ステパノは最初に、伝道もできないで仆れてしまった。殺されてしまった。

6 **使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。**

按手したわけです。按手の祈りです。もう聖霊が来てますから、按手すると御霊が伝わるわけだ。それでますます弟子の数が増えた。この時は、もちろん第一人者はペテロです。ペテロとヨハネとヤコブ。パウロはまだ後のはなし。

●聖霊の権威

8 **さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大いなる不思議と徴とを行えり。**

キリストの贖罪と聖霊、これが「恩恵」。特に聖霊は力を持っているから、そこで「恩恵と能力」

というような言い方をした。

**「不思議と徴」**

という言い方はよく、してありますね。普通の人には分からないから、「不思議」という。これは聖霊のわざですから。そのわざがそこに現れるのが「徴」です。

9 **ここに世に称うるリベルテンの会堂およびクレネ人、アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸会堂より、人々起ちてステパノと論ぜしが、**
10 **その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。**

それはかなわんです。権威がありますし、力を持っているから。そしたら、

「これはけしからん、モーセの言い伝えや律法に背いている」

と。

11 **乃ち或者どもを唆かして『我らはステパノが、モーセと神とを瀆す言をいうを聞けり』と言わしめ、**12 **民および長老・学者らを煽動し、俄に来りてステパノを捕え、議会に曳きゆき、**13 **偽証者を立てて言わしむ『この人はこの聖なる所と律法とに逆う言を語りて止まず、**14 **即ち、かのナザレのイエスは此の所を毀ち、かつモーセの伝えし例を変うべしと、彼が云えるを聞けり』**

と。

「もうキリストはモーセよりか次元が違うんだ」

というわけだからね。今のユダヤ人も相変わらず、このキリストを受けとらない。キリストが

「**三日で立てる**」

なんて言ったものだから。これはもう当然です。キリストから受けとったことをはっきり言っているんだから。キリストも、そういうわけで、十字架に懸けられてしまったから。

「新興宗教だ」

というわけでね。新興じゃないですよ。旧約を満たしてそれを乗り越えてしまった宗教ですから、いわゆる新興宗教じゃないんだ。

「もう律法の世界ではどうにもならん、本当の福音はこういうものだ」

ということを言った。

15**ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔の如くなりき。**

という不思議な言葉がある。光っているんだな。律法の世界ではこういう顔は出てこない。福音の世界でなければ、この輝きはないということを、事実をもってステパノは証明しているわけです。日本の一流の坊さんがどこか違うのと同じでね。我々も聖霊に満ちた時には、そのような権威を、光を、何かしらんけれども、戴いているわけです。

## ●ステパノの大演説

７章です。

1**かくて大祭司いう『此等のこと果たしてかくの如きか』**2**ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だカランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、栄光の神あらわれて、**3**「なんじの土地、なんじの親族を離れて、我が示さんとする地に往け」と言い給えり。**

もう創世記をズーッと語っていくわけです。ここの所は創世記12章。だから、使徒行伝第７章を読もうと思ったら、創世記を読めばいいわけです。７章の注解は創世記そのものです。創世記の大部分だね。出エジプトまでかかっている。それを、演説を始めてしまったんだから。これは、

「本当にステパノが語ったんだ」

という学者と、

「いやルカが大分付け加えてやったんだ」

と学者はいろんな事を言いますが、しかし、原作はステパノに相違ない。

6**神また其の裔（すえ）は他の国に寄寓人（やどりびと）となり、その国人（くにびと）は之を四百年のあいだ奴隷となして苦しめん事を告げ給えり。**7**神いい給う「われは彼らを奴隷とする国人を審かん、然るのち彼等その国を出で、この処にて我に事（つか）えん」**8**神ま**

た割礼の契約をアブラハムに与え給いたれば、イサクを生みて八日めに之に
割礼を行えり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。9先祖た
ちヨセフを嫉みてエジプトに売りしに、神は彼と偕に在して、10凡ての患難
より之を救い出し、エジプトの王パロの前にて寵愛を得させ、また智慧を与
え給いたれば、パロ之を立ててエジプトと己が全家との宰となせり。11時に
エジプトとカナンの全地とに饑饉ありて大いなる患難おこり、我らの先祖た
ち糧を求め得ざりしが、12ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先ず我ら
の先祖たちを遣す。13二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏
族パロに明かになれり。14ヨセフ言い遣して己が父ヤコブと凡ての親族と
七十五人を招きたれば、15ヤコブ、エジプトに下り、彼処にて己も我らの先
祖たちも死にたり。16彼等シケムに送られ、曾てアブラハムがシケムにてハ
モルの子等より銀をもて買い置きし墓に葬られたり。17かくて神のアブラハ
ムに語り給いし約束の時近づくに随いて、民はエジプトに蕃えひろがり、
18ヨセフを知らぬ他の王、エジプトに起こるに及べり。19王は悪計をもて我
らの同族にあたり、我らの先祖たちを苦しめて、其の嬰児の生存うる事なか
らんよう、之を棄つるに至らしめたり。20その頃モーセ生まれて甚うるわし
くして三月のあいだ父の家に育てられ、21遂に棄てられしを、パロの娘ひき
上げて己が子として育てたり。22かくてモーセはエジプト人の凡ての学術を
教えられ、言と業とに能力あり。23年齢四十になりたる時、おのが兄弟たる
イスラエルの子孫を顧みる心おこり、24一人の害わるるを見て之を護り、エ
ジプト人を撃ちて、虐げらるる者の仇を復せり。25彼は己の手によりて神が
救いを与えんとし給うことを、兄弟たち悟りしならんと思いたるに、悟らざ
りき。26翌日かれらの相争うところに現れて和睦を勧めて言う「人々よ、汝
らは兄弟なるに、何ぞ互いに害うか」27隣りを害う者モりーセを押退けて言う
「誰が汝を立てて我らの司また審判人とせしぞ、28昨日エジプト人を殺したる
如く、我をも殺さんとするか」29この言により、モーセ遁れてミデアンの地の
寄寓人となり、彼処にて二人の子を儲けたり。30四十年を歴て後シナイ山の
荒野にて、御使、柴の焔のなかに現れたれば、31モーセ之を見て視るところ
を怪しみ、認めんとして近づきしとき、主の声あり。曰く、32「我は汝の先
祖たちの神、即ちアブラハム、イサク、ヤコブの神なり」モーセ戦慄き敢
えて認むることを為ず。33主いい給う「なんじの足の鞋を脱げ、なんじの立
つところは聖なる地なり。34我エジプトに居る我が民の苦難を見、その歎息
をききて之を救わん為に降れり。いで我なんじをエジプトに遣さん」

●我は在りて在らしむるもの

そこでモーセは平伏して、神のみ告げを受けた。これが、

**「我は在りて在るものなり」**

と。私は、

「我は在りて在らしむるものなり」

と訳していますが。その神さまの御力によってとうとう出エジプトを敢行した。これは出エジプト記の14、15章の所です。

「四十年、四十年」

と書いてあるけれども、この「四十年」という数はもちろん正確な数じゃない。「四十」というのは何かそういう宗教的な数らしい。ここでもやっぱり不思議と徴が現れた。

36**この人かれらを導き出だし……四十年のあいだ荒野にても、不思議と徴とを行いたり。**37**イスラエルの子らに「神は汝らの兄弟の中より我がごとき預言者を起こし給わん」と云いしは、此のモーセなり。**

これは申命記の18章。それからずっといきまして、

「なぜこんな荒野で生活させるのか、何も食べる物がないからエジプトに帰りたい」

なんてことを言いだしてみたり。

「この神さまはダメだから、モーセの兄弟のアロンに神々を造ることを頼んで、金の牛を造って拝んだ」

なんていう、馬鹿らしい事が起きた。また、その審判にも合うんですね。出エジプトの32章。ここにも

**「荒野にて四十年の間」**

と書いてある。「モロクの幕屋と神ロンパの星」とは、みんなこれ偶像です。

**「われ汝らをバビロンの彼方（かなた）に移さん」**

なんていう、こういう言葉はちょっと飛び過ぎている言葉ですけれども。

それで、曠野の旅でもって神さまとの会話をした、礼拝をした。それが

**「証（あかし）の幕屋」**

と書いてある。自分達の住む幕屋と神さまとの出会いの幕屋と二つあるわけです。モーセは、しかし、十誡を賜りましたから。その事はちょっとここにははっきり書いてないようだな。ちょっとおかしいね。それから、後はダビデ、ソロモンのところまで来てしまったな。それから預言者。特に、48節。

48**されど至高者（いとたかきもの）は手にて造れる所に住み給わず、**

これは列王記略上の８章に出ている。

**即ち預言者の**49「**主のたまわく、天は我が座位（くらい）、地は我が足台なり。汝等わが為に如何なる家をか建てん、わが休息（やすみ）のところは何処なるぞ。**50**わが手は**

**凡て此等の物を造りしにあらずや」と云えるが如し。**

「そんな余計なことを人間が造ったって、そんな所じゃない。神さまは天地を幕屋としていらっしゃる」

と。これはイザヤ書の40章です。第二イザヤの言葉です。これは、しかし、歴史を語って、これではまだ証言にはあまりなってないんですけれども。とにかく、

「お前たちの信仰はかたくなである」

ということを語って、そこでちょっと飛躍しているですね。

## ●聖霊に逆らう

**51 項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ、**

この「項強くして心と耳とに割礼なき者よ」という言葉の精神はエレミヤ記の９章に出ている。

**汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。52 汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来（きた）るを預（あらか）じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53 なんじら、御使たちの伝えし律法（おきて）を受けて、尚（なお）これを守らざりき』**

預言者たちは実は、モーセをもうひとつ越えている。そこが大事なわけでね、律法を越えているんです。非常に預言者達は律法を重んじましたけれども、いわゆる律法では、書かれたる律法ではなくて、活ける神の言に従って動くというのが預言者ですから。そして、それは神の霊によって動いて、また、言わされているのが、預言者ですから。そこらのことをはっきり説明はしていないですね、この言葉の中には。

ところが、預言者たちは皆やはり迫害された。ということは、当時の人たちがやはり、自分たちのいい加減な、律法にも背いているいい加減な在り方に対して、預言者にはっきりと審判をさせられたから、それで、預言者を殺した。

預言者の言葉は、本当は、神の霊によって神の言をいただいて語っていたので、モーセの律法をただ言っていたのではもちろんない。そこらの内容的な区別をはっきりここには言ってませんけれども、そういうことですね。

そして、「義人」というのはキリストのことです。預言者たちが、分からないけれども、とにかくメシヤがやってくる。預言者たちが言っているメシヤはこのキリスト、義人キリストなんだ。それをとうとう殺してしまった。それは聖霊に逆らっているからなんだと。

この場合の

「聖霊」

というのは、もちろんステパノは十字架・聖霊を受けた聖霊ですけれども、預言者たちは

「エホバの霊」

です。エホバの霊も、「聖き霊」という言葉が詩篇にも出ていますが、キリストの十字架を通った聖霊とは違うけれども、とにかく、神の霊に、聖霊に逆らっている。霊および霊言に逆らっている。しかも、御使たちの伝えた律法を受けてこれをなお守らないという。

「聖霊に逆らう」ということは、キリストが言われているように、

**「聖霊に逆らう罪は許されない」**

という。あらゆる罪は許されるけれども、聖霊に逆らう罪だけは許されない。聖霊に逆らうのは、要するに、聖霊を受けないでバカにしているんだ。知らないのはいいけれども、逆らうのはダメですよ。聖霊を受けた者たちに対してパリサイ的に逆らっていると、これは間接に聖霊に逆らっていることになる。

## ●天国人

人間小池は罪びとに過ぎない。けれども――私は何と言われようとそれはいいよ――ただ、私が証しているところの、語っているところの、告白しているところの、聖霊を認めないならば、それは聖霊に逆らうことになるから、その人たちがどうなるか知らんよ。

皆さんも、それだけの権威は聖霊において持っている。万人はこれ罪びとで、そんなことは同じことだ。義人はキリストの他にいないんだから。ところが、その罪びとに聖霊が臨んで、そしてこれを受けとれば――もちろん十字架が土台ですけれども――これが救いとなる。

「天国人」

だ。我々は天国人です。

しかし、どういう人たちが天国に行くかは、誰も知らん。だけれども、聖霊にあって、キリストの十字架・聖霊を本当に全身で受けとっていれば、これはもう、天国に救われるという確信ならざる確信を私たちはいただきながら歩けるわけです。躓いたって転んだって、そんなことは問題にならない。

「だから躓いても転んでもいい」

ということじゃないけれどもね。そういうわけで、この御霊の世界は、我々の救いの確かさというものは、我々の実存の側にはない。キリストの業の方にある。キリストの業は十字架と聖霊のことですから。

54 **人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯（はがみ）しつつステパノに向かう。**
55 **ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、**
56 **『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』**

これはもう本当にそうですよ。右でも左でもいいよ。天界に行く幻を見る。とにかく、我々は次の素晴らしい世界の希望を持っている。希望をいただいているんだから。願望じゃな

い。賜りたる希望。必ず天界に行きます。だから、私はこの世を去る時には、冥目しながら、天界の幻を見させられながら行けると思っている。それはもう、

「小池先生、万歳！」

と言ってくれなくては。泣く必要は一つもない。皆、喜んでもらいたい。まだちょっと行かないよ（笑）、まだ仕事があるから。まだ10年は仕事がある。

## ●天国行きか地獄行きか

ステパノは本当に盛んなる天界の輝かしい幻を、キリストを霊視した。石で撃たれようが、

「お前たちは、石で撃っているその石で今度は自分を撃つことになるぞ」

と。

散々、人殺しをした一番の野郎はスターリン、それからヒットラー、それから今度のフセイン。この三人は非常に悪い野郎だ。フセインなんてのは、あれはもう地獄行きだ。権力者、それから封建時代の代官みたいな悪い奴ら、ああいうのはみんな地獄行き。これはもう、キリスト教でも仏教でも、極楽・地獄ということは言っているんだから。これはもう本当にそうなんだ。

魂の行く先はどっちかなんだ。地獄に落ちそうになった片一方の十字架の盗賊は心砕けたから、

**「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」**

と言われた。あんな恵みはどこにあるか。キリストと最初に行った、救われた奴は片一方の十字架の盗賊だ。もう片一方は傲慢であるものだから、これは地獄へ行った。はっきり、

「魂が平伏すか平伏さないかで、天国へ行くか地獄へ行くか」

これが人間を区別する一番大きな区別です。自己主張はダメ。要するにエゴイストということ。

「サタンはエゴイストである」

と、ゲーテが『ファウスト』の中でも書いている。

57**ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩(おお)い心を一つにして駆け寄り、**58**ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。**

ステパノをエルサレムの町から追い出して、そして、とうとう石で撃った。冒瀆者を石で撃つことはモーセの律法の中にあるから。彼は冒瀆者じゃないんだ。冗談じゃない。神さまを本当に讃美している人なんだ。

59**かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』**

ここでも、

「主イエスよ！」

だよ、「神よ」じゃないよ。キリストにいかに救われたか、ということですね。私たちが

「主さま！」

と言うのは同じことなんだ。

60 **また跪(ひざま)づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。**

**斯く言いて眠に就(つ)けり。**

「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」

と。キリストの十字架上の言葉そのまま。だけども、「負わせ給うな」と言っても、彼らが悔改めなかったら、相変わらず傲慢であったら、それは、罪は負わせられるよ。裁かれるよ。それまでも赦(ゆる)すわけにいかん。

赦すというのは、赦しているんだけれども、受けとらなければ、自分でもって赦しを受けとらない、自分で自分を審くことになる。

「赦されるか」

なんて言ってね、傲慢になったら、これはもう自分でもって赦されないことになり、自分で裁かれている。裁かなくても、自分で自分を裁いていることになる。

黙示録に出ているでしょ。王様や大臣や権力者や軍人や、そういう力のある奴、権勢のある奴がみんな、キリストの

「羔(こひつじ)の怒」

が恐ろしくなってしまって、山の下に隠れようとする。ダンテの地獄はあの通りではもちろんないでしょうけれども、あのダンテの地獄は一つの徴ですから。それは真理です、現実です。『往生要集』というのもそうらしいね。そういうことは教育の上でも少し語らなければいけないんだよな、魂の世界がいかに厳粛なものであるかということを。

## ●最初の殉道者ステパノ

**斯く言いて眠りに就けり。**

「眠りに就けり」は余計だ。眠らなくたっていい。

「斯く言いて黙せり」

黙ってしまったと。眠りはしないよ、ステパノの魂は天界に躍って行ったんだから。「眠りにつけり」なんて、日本人の言うようなこと、ちょっとおかしいなこれ。眠ったような状態になりました、ということだ。

**「眠りにつけり」**

なんて、あなた方、そのまま思ったらダメだよ、これ。ルカは何を書いているか、と私は言いたいくらいだ。

「永眠しました」

なんて、私は絶対に書かせないから、家で。私は永眠なんかしないんだから。

御霊の世界の烈々たるこの生命力は、

「私の信仰」

なんて言っている世界じゃない。

「自分の信仰」

なんか問題にしているうちはダメですよ。

仏教の第一流の坊さんは皆そのような次元にいる。だから、私は尊敬する。それから預言者と使徒、それから歴史上の特別な人物。ゲーテなんかももちろんその一人。ダンテ、ミルトン、シェークスピア、ブラウニング、ブレイク。アインシュタインもそうだね。とにかく、そういった輝かしい――輝かしいと言ったって言葉がおかしいけれども――本当に全生涯を燃やしたような人たちの伝記は読みなさいよ。

ところがサウロは――第８章１節はもう第７章の終わりの句といってもいい――

**1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。**

この時に「可し」としたけれども、サウロはそれからやっつけられる。ステパノの代わりにキリストがやってくる。

**「何ぞ、我を迫害するか！」**

と。今度は、サウロはひっくり返されるところに来ますから。

「最初の殉道者ステパノ」

です。キリストの道に殉じた最初の人がこのステパノ。ステパノなくしてパウロなし。フスという、これも焚かれた。マルチン・ルターの先駆者です。それから、洗礼のヨハネ、これがキリストの先駆者。そういう先駆けた人たちの特別な使命を忘れてはいかん。私にとっては私の兄貴です。

内村先生の聖霊について書いていらっしゃるところを読んだけれども、やっぱり「について」語っている。残念ながら、内村先生といえどもね。先生は文章にはなかなか力はありますけれども。

だから、我々はとにかく聖書の中に自分を没頭して動いている人間だから。召団のあなた方一人一人の使命は重大だ。我々は、ステパノの棄身の証、聖霊の棄身の証は、これは肝に銘じなければならないところです。